

「神のことを思うとは」

2022年8月7日（日）仙台教会主日礼拝説教 マルコ8：31～38

牧師 宇都宮 毅

おはようございます。広島、長崎に原爆が投下され、昨日、そして明後日で77年が経とうとしています。悲惨な状況を生んだ戦争を否定し、私たちの国は武力を持たない平和国家として、世界平和を作る理想を掲げて、出発したように思います。けれども、その後世界中で戦争が終わることはなく、今もウクライナにおいて、戦争が行われています。そんな戦争において、重要とされるのが情報だと言えます。ロシアは全世界に嘘の情報を流すための部署を作り、インターネットでの操作を行っています。現実の出来事を自分たちの都合の良いように操作し、人々に広がって困る都合の悪い情報はこの世から消し去るといようなことが起きているのです。それは検閲ということだろうと思います。

今朝はこのような他者の思想や価値観を否定する行動、検閲に対して、マルコ8章31節以下から、一緒に考えてみたいと思います。

皆さんは検閲という言葉を知っていて、どのように思うでしょうか。この禁止が述べられているのが日本国憲法です。国民の権利及び義務の中に、それはあります。そして検閲というのは狭義においては国家等の公権力が表現物や言論を精査し、国家が不当と判断したものを取り締まる行為という意味になります。

検閲とは公権力が行うものです。力を持った者が行うことです。戦中の日本の教会はこの検閲の下にありました。礼拝を行うときには会堂の後ろのほうに、特高と呼ばれた特別高等警察官が座っていました。彼らは牧師が国家に反逆するようなことを語らないか、チェックをしていたのです。

検閲というものが公権力によるものだと言いましたが、個人においても、他者の考え方や価値観を否定し、自分の考えている価値観に誘導しようとすることもあるだろうと思います。

約2000年前、イエスが弟子たちを連れて、ガリラヤ湖から北に60キロのところにあるフィリポ・カイサリア地方に出かけたときの出来事です。イエスが弟子たちに、「人びとは、わたしのことを何者だと言っているのか」と尋ねました。弟子たちは人びとが「洗礼者ヨハネだ。エリヤだ。預言者の一人だ」と言っていることを紹介したのです。それに対して、イエスは「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか」と尋ねます。するとペトロが「あなたは、救い主、メシアです」と答えたのです。それを聞いたイエスは弟子たちに自分のことを誰にも話さないように、戒められたと述べられています。戒められたという言葉は、本来の意味は厳しく叱りつけたという意味です。このとき、イエスはそ

もそも自分が何者であるかなどと言うことを議論するな、救い主などと絶対語るなど述べたこととなります。

そんな出来事があったから、イエスは「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日の後に復活することになっている」と弟子たちに語ったのです。恐らくこの時、イエスは自分が政治家や宗教者たちから、殺される危険性を感じていたのだらうと思います。イエスという存在、その生き様が公権力側の者に検閲され、抹殺される危機感をイエスは感じていたのでしょう。すると、弟子のペトロがイエスをわきへ連れ出して、いさめ始めます。いさめ始めるという言葉に訳されていますが、ここにおいても原文では、叱り始めたという意味です。ペトロは、イエスに対して、そんなことを言うなど人びとの目に触れないところに連れ出して、強く忠告したということです。

このペトロの行動も、検閲に近いものだらうと思います。このことの前、ペトロはイエスのことを救い主、神から油注がれた特別な存在だと告白していました。そんな特別な存在が、これから排斥され、殺されるということを群衆の前で言ってしまったのです。ペトロは自分が考える救い主が、そのようなことになってはならないと考えたのでしょう。ペトロの価値観です。救い主はこの世において、勝利して、自分たちと共にいてくれなくてはならないと思っていたのでしょう。すると、イエスは振り返って、弟子たちを見ながら、ペトロを叱って言います。「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている。」

サタンは悪霊たちの親玉です。そしてサタンは人間を誘惑し、神からひき離す者です。ペトロはイエスを神から離すために、誘惑しようとしたということです。なぜ、ペトロはそんなことをしようとしたのでしょうか。それは、ペトロにとって、イエスは自分にとっての救い主であり、そうあり続けてほしいという願望があったからだと言えます。その彼の願望が現実のイエスと乖離したとき、ペトロは怒りを持ち、イエスを叱り始めたということになります。生きているのはイエスなのに、その生き方をペトロが決めようとしていたのです。

ここで語られたイエスの言葉は現実の状況を語ったに過ぎません。このままでは自分は殺され、その三日後に、自分が生きていたということが思い出されるだらうと語っただけです。ところが、ペトロはその現実から目を背け、自分の理想を正義としたのです。ペトロはイエスが語ったことを自分の理想を下に、検閲したのです。それは自分の考えるものとは違っていたのです。そして、もしかしたら、そのようなことをイエスが語れば、イエスを救い主とする群れが増えていかないとペトロは考えていたのかもしれませんが。彼の理

想、彼の思いが、現実のイエスを非難したのです。

戦前、戦中の日本にもそのようなことが起こっていたように思います。大東亜共栄圏という西洋列国に支配されているアジア諸国を解放するという一方的な理想、八紘一宇という日本が天皇を頂点とした神の国だという錯覚。そのようなものを当時の日本は現実にしようと、いいえ、それこそが現実だと思い込んだのだろうと思います。けれども、現実にはなかったのです。そのずれは日本をただの侵略者としていったと言えるかもしれません。さらに、理想を現実とするために、教育を中心とした検閲システムを構築し、人びとが互いに密告するような制度を作りました。言いすぎかもしれませんが、ペトロはそのようなことをしようとしたのです。自分の理想を相手が生きている現実を越えて、押しつけようとしていたのです。

イエスの怒りは、現実に生きている私を見てほしいという思いから来ていたかもしれません。自分をあなたの理想とするメシアにしないでほしいということです。そのとき、イエスはペトロに、「あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている」と語りました。

神のこと、神に関わることは、何なのでしょう。人間のこと、人間に関わることは何なのでしょう。

ペトロが人間のことを考えているのだから、良いではないかと思ってしまう。しかし人間が人間のことを考えるということは、限界があるのです。結局自分の価値観でしか、人のことを見られないことになります。それは自分の価値観を押しつけることになってしまいます。

けれども、神のこと、神に関わることを考えるとは自分が絶対なる者ではなく、神が人間を、この世界を創った存在だということから考えることになります。神に造られた人間はひとりひとりが特別で、異なり、豊かなのです。その多様性に気づくとき、自分の考え、価値観が絶対なるものではないことを知ることになるのです。人間を考えることのみ留まるとき、自分の枠組みの中だけで、全ての世界を考えることになり、神を考えたとき、その造られた世界、命の多様性から考えることになります。

イエスが語った神のことを考えるとは、実は人間のことを考えるなど言っているわけではありません。しかし自分だけの理想、自分だけの価値観を他者に押しつけているペトロのあり方は、神のことを考えない狭い視野に陥った人間そのものを表していたのだらうと思います。そしてその神のことを考えないという立ち方は、異なる人たちや異なる価値観を否定する生き方になってしまうのだらうと思うのです。

それからイエスは群衆と弟子たちを呼び寄せて、このように言いました。「わたしの後

に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである。」

自分を捨てて、イエスは従ってきなさいと語っています。それは自分が考えている願いや理想というものを捨ててという意味になるのでしょうか。そして自分の十字架とは自らが神に与えられた人生、現実のことです。それを背負って従ってきなさいとイエスは言われています。サタンとは私たちの内にあります。自分が神のようになり、人を裁き、自分は正しいと考えさせる誘惑です。

自分の価値観を押しつけ、他の価値観を否定するような行動とはまさに平和とはほど遠いものなのです。

また神のことを考えると現実の人間の営みを見捨て、ただ漠然と神に任せるということとは違うことです。神から人間のことを考える視点というもの、つまり自己を絶対化しないための客観的な視点というものが私たちには必要になっているということになります。

過去の日本は八紘一宇、大東亜共栄圏という理想において、一つになろうとしました。それはまさにあのバベルの塔を築くことと同じであったと思います。その建築のため、多くの奴隷労働者を使い、同じ言葉、つまり同じ価値観の教育、宗教を必要としたのです。それと同じ歩みを二度としてはいけないのです。言葉をバラバラにされ、地上に散らされたことを否定するのではなく、豊かさと考え、その多様な私たちがどうしたら、共に生きていくことができるのかを考える必要があると思います。

現代の私たちは危ういところに再び立っていることを思います。そんな時だからこそ、私達もイエスのように、声を上げたいと思います。「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている。」私たちの国が二度と戦争に関わることがないように、また日常の平和を壊すような他者の価値観を否定し、その命を軽んじることがないように、私達はこれからも歩んでいきたいと思います。

最後に聖書を一カ所お読みして、メッセージを終わりたいと思います。
マルコ 9：50 「塩は良いものである。だが、塩に塩気がなくなれば、あなたがたは何によって塩に味を付けるのか。自分自身の内に塩を持ちなさい。そして、互いに平和に過ごしなさい。」